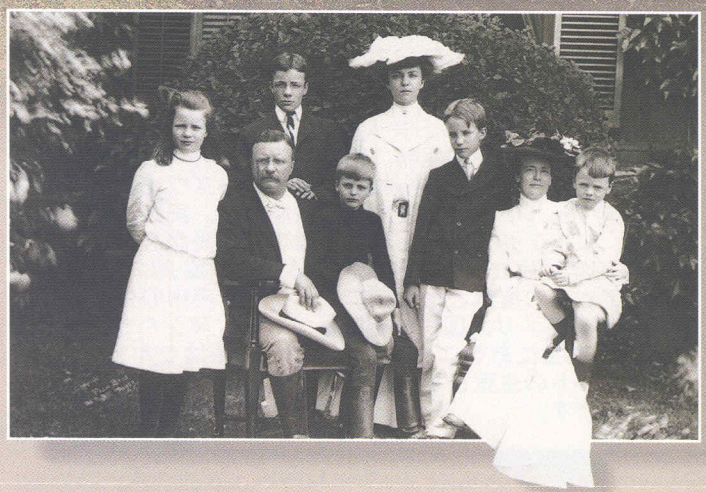
サガモアヒル

公式観光ガイド

ニューヨーク州国定史跡

アメリカ合衆国
内務省国立公園局



「家は、耕地や樹林によって他の家々から隔てられ、オイスターベイとロングアイランド海峡を望む丘陵の頂きに立っている。長く伸びた陸と入り江の向こうには、沈む夕陽が見える・・・。私たちはどの季節も大好きだ。冬の雪やすっかり葉を落とした森の木々、春にはみなぎる草木の息吹と木々の枝を彩るたくさんの花。初夏の緑の葉のさざめきが鬱蒼とした木陰に姿を変える頃、穀物は金色に揺れ、果物や房をつけたとうもろこしは実りの時を迎える。やがて、錦のようにあでやかな紅葉が、肌を刺す冷たい秋風にちりぢりに散らされると、一年の終わりが近づいて来る」

Theodore Roosevelt

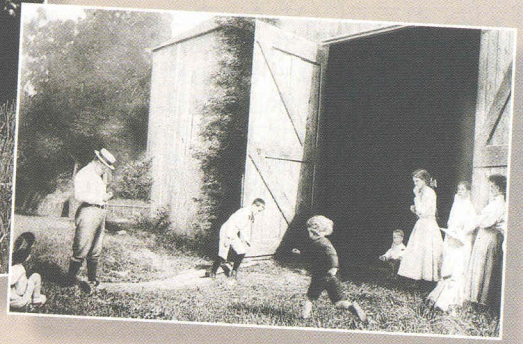
セオドア・ローズヴェルト

写真上：ローズヴェルト家（左から右へ）エセル、セオドア・ローズヴェルト、セオドア・ジュニア、アーチー、アリス、カーミット、イーディス・ローズヴェルト、クエンティン

写真下：書斎で過ごすローズヴェルト

写真中段（左から右へ）：家族のハイキングを先導するローズヴェルト；子供たちのかけっこのタイムを計るローズヴェルト

ローズヴェルトは子供たちについて「*よく裸足になった・・・水泳、ハイキング、ボート漕ぎ、冬にはそり遊びやスケートもした。牛や鶏、豚も彼らの友だちだった*」と記しています。



セオドア・ローズヴェルトが率いた義勇騎兵隊ラフ・ライダーズの帽子と剣

公人の癒しの場

セオドア・ローズヴェルトが15歳の時、彼の父は家族で過ごす夏の別荘をオイスターベイに構えました。それ以降、彼は休みのたびに、近くのコーブネックの野原や樹林を探検して過ごしました。10年後の1880年、若きローズヴェルトとフィアンセのアリス・ハサウェイ・リーは、現在、屋敷が建つコーブネックのこの丘陵地を購入しましたが、当時は納屋が一軒立っているだけの、木も植えられていない土地でした。ローズヴェルトはこの土地に1万ドルの頭金を払い、残りの2万ドルを20年の住宅ローンで返済しました。敷地の総面積は約63ヘクタール、そのうち約39 ヘクタールを彼が保有し、残りを親戚に売りました。

ニューヨークのラム・アンド・リッチ社が屋敷の設計をしましたが、工事の最終契約がまとまる前の1884年、ローズヴェルトの妻と母がニューヨークの自宅で同じ日に息を引き取りました。妻が腎疾患のブライト病で亡くなったのは、彼女の名にちなんで命名された第一子アリスの出産後わずか2日目でした。幼い娘の暮らしにふさわしい住まいを持とうと決心したローズヴェルトは、すぐにロングアイランドのジョン・A・ウッド・アンド・サン・オブ・ローレンス社と契約し、約1万7千ドルをかけて、亡き妻と計画していた家を着工させました。1885年に屋敷が完成し、ローズヴェルトの妹のアナが赤ん坊のアリスと移り住みましたが、ローズヴェルトは新居とノース・ダコタの大農場を行き来して暮らしていました。

彼は初め、この家屋敷を亡き妻アリスを偲んで「リーホルム（リーはアリスの旧姓）」と名づけるつもりでいましたが、幼なじみのイーディス・カーミット・カーロウとの交際が始まり、考え直しました。ローズヴェルトによれば「サガモアヒルの名は、この丘陵地の権利を譲り渡したネイティブアメリカンの小部族、モハニス族の年老いたサガモア（首長の意味）に由来する」そうです。1886年12月、ローズヴェルトは再婚し、翌春、夫婦はサガモアヒルに転居してきました。公職のため留守にせざるをえなかった場合を除き、ローズヴェルト一家はその後ずっとここで暮らしました。セオドア・ジュニア、カーミット、エセルの三人の子はサガモアヒルで生まれています。

1902年から1909年の夏のサガモアヒルは、毎日の国家業務の中心となったばかりでなく、国内外の重要で劇的なできごとの舞台にもなりました。そのひとつに、1905年8月、ローズヴェルトが、日露戦争中のロシアと日本の特命全権公使にサガモアヒルの書斎で別々に会見し、対談を取り持ったことが挙げられます。それをきっかけに公使たちは会議を始め、1905年9月5日のポーツマス（ニューハンプシャー州）条約締結により、二国間の争議に終止符が打たれました。ローズヴェルトはこの功績を讃えられて、後にノーベル平和賞を受賞しています。

「夏のホワイトハウス」の張り番記者たちは、大統領一族の行動を頻繁に記事にして送信しました。ローズヴェルトは自ら提唱した「エネルギッシュな生活」を実践していたので、ゲームやハイキング、水泳、まきわり、乗馬、お気に入りの耕地や樹林の探検など、子供たちとともに過ごす姿がたびたび目撃されました。家族のペットを埋葬するため、小さな動物墓地へ向かう子供たちの悲しげな葬列に夫妻が付き添うこともありました。

1919年1月5日、ローズヴェルトは「私がどれほどサガモアヒルを愛しているか、いつかきみにも分かるだろうか」と病床で妻に言い、翌日、眠りについたまま60歳で息を引き取りました。イーディス・ローズヴェルトは1948年に87歳で亡くなるまで、サガモアヒルで暮らしました。

サガモアヒル邸内

書斎

ダイニングルーム

北の部屋

サガモアヒルは長く四方に伸びたヴィクトリア朝様式の建物で、部屋は23室あり、木材の骨組とレンガからできています。そのたたずまいはローズヴェルト一家が暮らしていた当時とほぼ変わりなく、家具や調度品のほとんどが実際に使われ、愛されていたオリジナルのものです。一階には大きな中央ホール、ローズヴェルトが私的なオフィスとして使った書斎、ダイニングルーム、キッチンと客間があります。この客間はローズヴェルト夫人のプライバシーを保つ居室として使われていました。

1905年に増築された北側の大きな部屋を設計したのは、ローズヴェルトの友人で、画家ジョン・ラファージの息子クリストファーです。縦9メートル、横12メートルあまりのこの部屋には、マホガニー、クログルミ、落羽松（ラクウショウ）、榛（ハシバミ）といったフィリピンとアメリカの木材が使われています。剥製や毛皮など狩猟の戦利品や本、絵画、国旗、調度品が多数飾られ、ローズヴェルトらしさがよく表れている部屋です。

二階には、寝室、子供部屋、客用寝室、大きな陶器製バスタブつきの部屋があります。セオドア・ジュニアは、このバスタブから水を流すと、「本当にびっくりするほど長くゴボゴボという排水音が続いた」と回想しています。「アイルランド人の乳母から、これは『蛇口の女』の泣き声だと聞かされて、その頭が一瞬でも見えないかと僕らは目を凝らして排水口を覗きこんだものでした」。

最上階には、ローズヴェルトの猟銃コレクションが収められた「銃の部屋」があります。彼は時々、家庭の喧騒から逃れ、この部屋で友人をもてなしました。また、多くの本や記事、演説もここで執筆しました。この階にはほかに、家事を受け持つ6人の使用人の住居と裁縫室、セオドア・ジュニアが大学入学前に使っていた寝室があります。家の南西には、広々としたポーチがあり、そこからオイスターベイやロングアイランド海峡が望めます。敷地内には植栽を施した庭園と、かつてセオドア・ローズヴェルト・ジュニアの私邸だった、オールドオーチャードミュージーアムがあります。

1948年のローズヴェルト夫人の死後、サガモアヒルの屋敷とその内部の家具や調度品、約34ヘクタールの土地がローズヴェルト協会に買い取られました。ローズヴェルト協会は「ローズヴェルトの人柄と功績、彼が提唱、実践した一個人として、またアメリカ人としての理想を国民が忘れないように」1919年に設立された非営利団体です。協会は1963年、サガモアヒルの屋敷と土地、ニューヨーク市内の生家と50万ドルをアメリカ国民へ寄贈しました。マンハッタンの東20丁目28番にあるニューヨーク市内の家はセオドア・ローズヴェルトの生家として国定史跡に指定されています。

ローズヴェルトの「エネルギッシュな生活」

ローズヴェルトほど魅力的な国家指導者はこれまでにいなかったと、多くの人々が感じました。崇高な道徳観に加え、時にはユーモアも感じさせる真摯な生き方を示した彼は、学者にも、「テディ（セオドアの愛称）」を実際以上に変人風に書きたてた大衆紙にも、たまらなく気になる存在でした。

1858年：10月27日、ニューヨークで父セオドア・ローズヴェルト・シニア、母マーサ・ブロック・ローズヴェルトの間に生まれる

1880年：ハーバード大学卒業、アリス・ハサウェイ・リーと結婚

1882-84年：ニューヨーク州議会議員

1884年：母と妻死去

1884-86年：ダコタ準州で農場を経営

1886年：イーディス・カーミット・カーロウと再婚

1889-95年：合衆国官吏制度改革委員

1895-97年：ニューヨーク市警察長官

1897-98年：海軍次官

1898年：米西戦争で初の義勇騎兵隊（「ラフライダーズ」）の連隊指揮官

1898-1900年：アメリカ合衆国副大統領に就任

1901-09年：アメリカ合衆国大統領に就任（ウィリアム・マッキンリーの暗殺により昇格）

1909-10年：アフリカ狩猟探検旅行、ヨーロッパ歴訪

1912年：アメリカ進歩党（ブルムース）の候補者として大統領選に出馬、敗退

1913-14年：南アメリカ探検旅行

1917-18年：第一次世界大戦のアメリカの役割を支持

1918年：息子のクエンティンがフランスで従軍中に被弾して死去

1919年：1月6日、サガモアヒルで就寝中に死去

ローズヴェルトは、率直でエネルギーにあふれる活動家と、本を愛する思慮深い文学者の両面を持つ類まれな人物でした。読書は彼の楽しみと同時に慰めでもあり、サガモアヒルで暮らした彼の内面は、屋敷に残る6千冊以上の本が語ってくれます。彼は伝記、古典、歴史書、詩、小説、科学など、幅広いジャンルの本を熟読しました。また、公私ともに非常に責任ある多忙な人生を送りながら、時間を見つけて、歴史、伝記、社会政治論評、自然科学、回顧録、旅行記、探検物語など30冊以上の著作を残し、多くの論説や論文、エッセイを執筆しました。独創的な思想家ではないと自認していたローズヴェルトですが、実際には素晴らしい執筆者であり、広い分野にわたる鋭いものの見方は現在でも興味深く受け止められています。

インフォメーション

サガモアヒル国定史跡は、内務省国立公園局が管理しています。管理者の住所は20 Sagamore Hill Road, Oyster Bay, NY 11771 です。

セオドア・ローズヴェルト邸の見学はガイド付きツアー（有料）のみです。春夏はツアーが大変込み合いますので、午前中の早い時刻にお越しになることをお勧めします。夏にはガイドつき自然散策も実施しています。ツアーのチケット、出版物はビジターセンターで取り扱っています。サンクスギビングディ、12月25日、1月1日は休園日です。開園日、開園時間についての詳細は公園局職員にお問い合わせください（電話516-922-4447）。

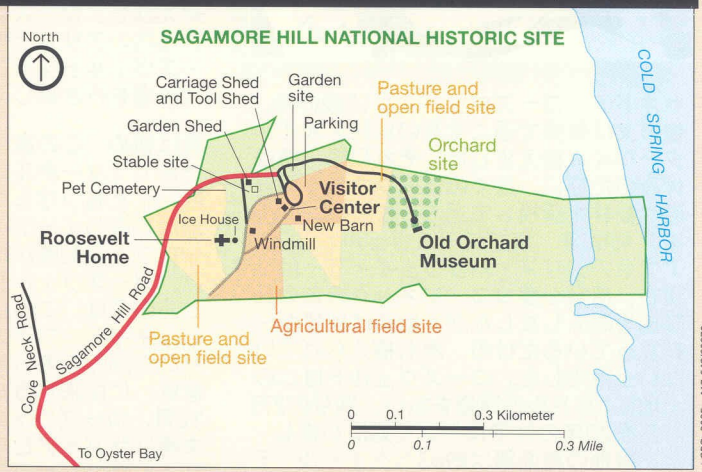
サガモアヒルはLong Island、Oyster BayのCove Neck Roadのつきあたりに位置します。ニューヨーク市内からは、Long Island 鉄道がPennsylvania駅（7番街と33丁目の角）とOyster Bay駅間を運行しています。電車が着く時刻にはタクシーが利用できます。車でお越しになる際は、Long Island ExpresswayをExit41で降り、NY106 North方面に進みます。この道はOyster Bayに続いていますので、あとはサガモアヒルへの案内板に従ってください。

オールドオーチャードミュージーアム：ジョージ王朝様式のこの家は1937年、陸軍准将だったセオドア・ローズヴェルト・ジュニアのために建てられたものです。1960年にローズヴェルト・ジュニア夫妻が亡くなった後、ローズヴェルト協会による1963年の寄贈に含まれました。ローズヴェルトの政治家としての経歴、サガモアヒルでの家族との生活、彼の子供たちの人生などについての展示があり、定期的にビデオプログラムが上映されています。

安全のために：ウルシにかぶれたり、ダニに噛まれたりする危険があるので、通路以外のところを歩かないでください。夏には熱中症にかかるおそれがありますので、無理のない範囲でお楽しみください。史跡内のフェンスは古いものが多く、危険ですからのぼらないでください。

アクセス：史跡の敷地内、セオドア・ローズヴェルト邸の一階、オールドオーチャードミュージーアムでは車椅子がご利用になれます。ミュージーアム内のビデオプログラムは字幕付きです。

ペットをお連れになる場合は、必ずひもでつないでください。また、史跡周辺の土地所有者の方々の権利を尊重してくださるようご協力をお願いします。木やフェンスにのぼったり、境界線を越えて立ち入ったりしないでください。



☆GPO: 2005—417-648/60079
Printed on recycled paper.

ローズヴェルト農場

ローズヴェルトが住んでいた当時から、サガモアヒルが実際に稼動していた農場だということは忘れられがちでした。彼は小麦、とうもろこし、乾草用の青草、良質の牧草であるオオアワガエリ、大麦、ライ麦を育て、牛と豚を飼っていました。また、野菜や草花を植えた約1ヘクタールの菜園もありました。家族のほとんどが農場の仕事に参加し、子供たちも自分たちが栽培する区分を持っていたそうです。ローズヴェルト夫人が農場の帳簿を管理し、ローズヴェルト自身も、乾草作りや家畜の世話などをよく手伝ったといいます。